

# 大腸がん検診 便潜血検査の勧め

## 大腸がん検診の第一歩は便潜血検査です。

大腸がんは、近年増えています。厚生労働省「人口動態統計」2015によれば、**女性では、がん死亡原因の第1位であり、男性も第3位となっています。**大腸がんの原因は、食事の欧米化などが関係しているといわれており、今後も増加すると予想されています。しかし、早期に発見して治療すればほぼ治癒が可能ながんです。国立がん研究センターがん対策情報センターの2015年の統計によれば、年齢別にみた大腸がんにかかる割合は、30歳代から始まり、50歳代付近から増加し始め、高齢になるほど高くなります。

**そのため、40歳を過ぎた方は便潜血検査などを含めた大腸がんの検査をしたほうがよいでしょう。**

当院健康管理センターの健康診断や、当院外来で便潜血検査を実施し、異常が見つかれば、更に進んだ検査を受けるのが大腸がんの早期発見に繋がります。

## 便潜血検査とは

大腸がんの検査と言うと、大腸を直接調べる検査を思い浮かべるかもしれませんが、大腸がん検診では便を検査する事でがんにかかっているかどうか調べることが出来ます。**大腸がんがあると、便が大腸の中を通っている間にがんの表面をこすって血が混じり、便中に混じった目には見えない僅かな血液を検出するのが便潜血検査です。**便に潜む血を測る検査が便潜血検査で、精度を高めるために、日を変えて便を2回採取し、1回でも陽性に出た場合を要精密検査とする「2日法」が一般的です。当院では、便にどれぐらいの量の血が混じっているのかがわかる「定量法」を用い、その結果をお伝えしています（当院では最も一般的な基準値の100以下陰性、101以上陽性を採用）。便の採取は自宅で行う事が出来、食事制限の必要もない簡単な検査です

## 陽性になったら精密検査を

便潜血検査で要精密検査になるのは、検査を受けた人の約5~7%で、大腸がんが見つかるのは、そのうちの数%程度です。便潜血検査は便中のヒトの血液に反応する試薬を用いていますので、痔などでも陽性になります。逆に、胃や十二指腸の少量の出血は消化されるので、陽性にはなりません。「便に血が混じっているとされているけど、もともと痔があるから、心配ない」と自己判断してはいけません。痔がある人でも、精密検査をしてみると、大腸がんが見つかるということは、珍しいことではありません。2日法どちらか一方でも陽性であった場合は、精密検査を受けるべきです。もう一度便潜血検査を行って、陰性であれば放置してよいでしょうかと質問されますが、便潜血検査の再検査は意味の無い検査です。便潜血検査で大腸がんを発見できる確率は、進行がんで80%程度、早期がんで40~60%といわれていますので、便潜血反応が陰性でも、腹痛や排便異常などの症状がある場合には、当科を受診し、精密検査の必要性について相談してください。

## 精密検査では大腸内視鏡検査を

大腸内視鏡検査は現在主流の検査で、胃カメラと似た少し長い内視鏡を肛門から大腸の中に挿入して観察します。この検査の利点は病変を直接見ることができ、生検や治療も同時に行える点で、精密検査を受けるなら、内視鏡検査をお勧めします。内視鏡検査は痛くて苦しいと聞かれたことがある方も多いと思いますが、当院では、鎮痛剤などの併用により、苦痛を出来るだけ軽減できるような検査を行っています。検査時間は、通常、約30分程度です。

大腸の壁の内側表面に近い部分にとどまっていると診断されるがん（早期がん）には、内視鏡による治療を行います。また、良性のポリープでも、大腸腺腫と呼ばれる将来癌化する危険性のある病変と判断した場合も治療します（大腸腺腫と大腸がんを併せると便潜血陽性の人の30%程度に達します）。

当院での大腸内視鏡検査により、過去6年間に健康管理センターで便潜血検査陽性となった方から135例の大腸がん（早期がん115例、進行がん20例）が発見されています。